

2025. 3. 16 (日) ルカ23:13~25

23:13 ピラトは、祭司長たちと議員たち、そして民衆を呼び集め、

23:14 こう言った。「おまえたちはこの人を、民衆を惑わす者として私のところに連れて来た。私がおまえたちの前で取り調べたところ、おまえたちが訴えているような罪は何も見つからなかった。

23:15 ヘロデも同様だった。私たちにこの人を送り返して来たのだから。見なさい。この人は死に値することを何もしていない。

23:16 だから私は、むちで懲らしめたくらうえで釈放する。」

23:18 しかし彼らは一斉に叫んだ。「その男を殺せ。バラバを釈放しろ。」

23:19 バラバは、都に起こった暴動と人殺しのかどで、牢に入れられていた者であった。

23:20 ピラトはイエスを釈放しようと思って、再び彼らに呼びかけた。

23:21 しかし彼らは、「十字架だ。十字架につけろ」と叫び続けた。

23:22 ピラトは彼らに三度目に言った。「この人がどんな悪いことをしたというのか。彼には、死に値する罪が何も見つからなかった。だから私は、むちで懲らしめたくらうえで釈放する。」

23:23 けれども、彼らはイエスを十字架につけるように、しつこく大声で要求し続けた。そして、その声がいよいよ強くなっていった。

23:24 それでピラトは、彼らの要求どおりにすることに決めた。

23:25 すなわち、暴動と人殺しのかどで牢に入れられていた男を願いどおりに釈放し、他方イエスを彼らに引き渡して好きなようにさせた。

<説教>

先主日の箇所(23:1-12)から続いて、当時ローマ皇帝によってユダヤの総督に任命されていたピラトによるイエスの裁判の様子が記されています。

ユダヤ人の最高法院は、イエスが人民を惑わし、ローマ皇帝カエサルに逆らい、自分が王キリストだと言っているとしてピラトに訴えていました(2)。ピラトはイエスを尋問しましたがその結果は「この人には、訴える理由が何も見つからない」ということでした(3-4)。しかしユダヤ人たちは尚も、イエスがガリラヤから始めてユダヤ全土で教え民衆を扇動していると主張したので、ピラトはイエスをガリラヤの領主ヘロデ・アンティパスのところに送りました(5-7)。しかしヘロデもイエスを有罪とせずにピラトのもとに送り返しました(8-12)。こうしてイエスは再びピラトの前にお立ちになり、裁判を受けることになりました。

ピラトはイエスを訴えたユダヤの最高法院の人々と民衆を呼び集め、判決を言い渡しました(13-16)。あなたがたユダヤ人たちが訴えているような罪がイエスには見つからなかったことは以前にあなたがたが傍聴している前でイエスを尋問し、結論した(4)とおりで変わりはないとピラトは言い渡しました(14)。イエスが無罪だという点については、これまで自分と敵対していたヘロデまでもが同じ見解を示したのだから間違いないというわけです(15a)。それでもしかしイエスを即時釈放とはピラトはしませんでした。否、できなかったのでしょうか。と言うのは、それではあまりにユダヤ人たちの機嫌を損ねることになり、

暴動騒ぎが起きたり、今度は自分が何かユダヤ人たちから言いがかりをつけられて、ローマ皇帝に訴えられたりするかもしれない。そうなるともた面倒なことになり、自分の地位が危うくなるとピラトは計算したのでしょう。それでピラトは自分自身では「イエスには何の罪もない、故に本当は即時釈放すべきだ」と確信しつつ、ユダヤ人たちに「提案」をしました。「見なさい。この人は死に値することを何もしていない。だから私は、むちで懲らしめたうえで釈放する。」と(15b-16)。つまり「この人は死に値することは何もしていないが、どうも何らかの過ちはあったようだ。だからあなたがたから訴えられることになったのだ。それで今後はそんな誤解を招くような言動は慎むようにとの教育的懲らしめを加えたうえで釈放する。それでいいだろう。」ということだったので。ユダヤ人たち、イエスを訴えた人々の嘘、不当、罪を見抜き、知りつつ、しかしそれらに毅然とした態度で、徹底した態度で対応することができなかった、しなかった。彼らからの批判、反撃を恐れ、自分の身分、地位を守ろうと、曖昧な態度で妥協した。内心、良心に従うならば「判決。無罪。故に即時釈放。これにて閉廷」と権威をもって宣言し、行動すべきだったのに、それをしませんでした。そこに「この世の権力者」「この世の裁判官」ピラトの「弱さ」「臆病」「罪」がありました。

そんなピラトの弱み、優柔不断に、イエスを訴えた人々はつけ込みました。彼らはピラトに対して強気に抗議しました(18-19)。欄外注に、また他の福音書にあるように(マタイ 27:15、マルコ 15:6、ヨハネ 18:39)、総督の権限で、過越の祭りのときに人々の願う囚人を一人釈放する習慣が当時ありました(こんな「しきたり」自体が総督による人気取りの一つだったのでとはとも考えられますが)。この慣わしをうまく利用して、自分はなるべく人々の評判を失わないように、傷つかないやり方でピラトはイエスを釈放しようと考えたのでしょう。「おまえたちはだれを釈放してほしいのか。バラバ・イエスか、それともキリストと呼ばれているイエスか。」(マタイ 27:17)。このように訪ねれば、さすがに人々も〈都に起こった暴動と人殺しのかどで、牢に入れられていた〉(19)バラバではなく、民衆を惑わしている(だけの)イエスを釈放するように言うだろうとピラトは期待したのでしょう。しかし人々は「その男を殺せ。バラバを釈放しろ。」と一斉に叫びました(18)。

これにはピラトも驚いたでしょう。何とかイエスを釈放しようと思って(直訳:「意志して」)、再び彼らに呼びかけました(20)。「では、キリストと呼ばれているイエスを私はどのようにしようか。」(マタイ 27:22)。「では、おまえたちがユダヤ人の王と呼ぶあの人を、私にどうしてほしいのか。」(マルコ 15:12)。

しかし彼らは、「十字架だ。十字架につける」と叫び続けました(21)。イエスをローマ皇帝に逆らい立つ者としてローマの権威である総督に訴えた以上、ローマ式の、しかも最も厳しく屈辱的な死刑である十字架刑を求めたのです。またユダヤ人にとっては、人を「木にかける」ことは、その人が神に呪われていることを意味していたので、イエスを神冒涇者で見なし、また憎み嫉んでいた人々からすれば十字架につけることが最も相応しい殺し方でした。なおこのときはバラバがこの十字架刑になる予定だったので。しょう。

ピラトはイエスの無罪について「三度目」の判決を宣告しました(22)。〈けれども、彼らはイエスを十字架につけるように、しつこく大声で要求し続けた。そして、その声がいよいよ強くなってい〉(23)きました。ついにピラトは完全敗北しました(24-25)。〈イエスを彼らに引き渡して好きなようにさせた〉(25)の直訳は「イエスを彼らの意志に引き渡し

た」です。ピラトは「イエスには死に値する罪が何も見つからなかった。完全無罪である。」と認め、宣言しながらも、またイエスを釈放しようと「意志し」ながらも、人の機嫌、顔色をうかがい、自分の保身のために、神から自分に与えられた権力を正しく用いませんでした。そしてユダヤ人たちはこの「神のしもべ」ピラトの権威に従いませんでした。後に使徒ペテロはこのユダヤ人たちの罪をはっきりと指摘しました。「あなたがたはこの方を引き渡し、ピラトが釈放すると決めたのに、その面前でこの方を拒みました。あなたがたは、この聖なる正しい方を拒んで、人殺しの男を赦免するように要求し、いのちの君を殺したのです。」(使徒 3:13-15)。

このように、総督ピラトにより(領主ヘロデによっても)無罪とされ、釈放しようとしたイエスは、バラバの釈放と引き換えに十字架につけられて殺されることになりました。それは見て来たように、ユダヤ人たちの罪であり、ピラト(異邦人)の罪でした。人間の彼ら人間の罪ある「意志」が確かに行われました。しかし同時にそんな人間の意志を上回る神の御意志(みこころ)が行われたのです。即ち、全く罪のない神の御子イエスが、全く罪深い私たちのために、私たちの身代わりに十字架にかかり、神に呪われた者として神の刑罰を受けて死んでくださったことです。そして「神はこのイエスを死者の中からよみがえらせました」(使徒 3:15)。バラバは罪深い私たちの象徴、代表です。また、イエスを受け入れずに、バラバを釈放しろ、イエスを十字架につけると叫び続けた人々もまた私たちの象徴、代表とすることができます。イエスを十字架につけたのは他でもない、この私たち、私なのです。私たちはその自分の罪を認め、私たちの罪のために十字架で死なれ、墓に葬られ、三日目によみがえられたイエス・キリストを信じなければなりません。そうやって罪と悪魔の支配から、永遠の滅びから解放(釈放)されなければなりません。